

ウトロ海域における保全と利用の取り組みの進捗状況について 2024年（令和6年）度知床ウトロ海域環境保全協議会活動報告

2024年度は例年の海鳥WEEKの開催、道内外のイベントへの出展を継続して行った。2022年の観光船事故を受けて自粛していたゴミ拾い活動を、観光船も航路として活用するフレペの滝と男の涙で行い、海鳥の生息環境保護だけでなく景勝地の美化にも繋がった。

「海鳥WEEK」の企画・実施

ケイマフリをはじめとした海鳥を通して、知床の海や観光に携わる様々な関係者が、知床の海の環境保全と適正利用について、改めて見直し、考えていく期間として設定しているもの。期間中は、主に以下3つの企画を実施した。

1. うみどりトーク

- ・ 海鳥の専門家（福田氏）が観光船やホテルで海鳥や知床の海域環境を解説するもの。
 ホテルトーク（期間中計4回） 参加者 99名
 観光船解説トーク（期間中計4回） 参加者 126名
- ・ 観光船おーらと知床自然センターのインスタグラムを利用してインスタライブを行った。ウトロ港で実際にケイマフリを観察しながら配信を行い、視聴者からの質問にも随時回答した。アーカイブ 2,199名閲覧（2月10日時点）。

2. 海鳥夕暮れクルーズ

海鳥の観察がしやすい夕暮れの時間に出港し、専門家（福田氏）の解説を聞きながら航行する、海鳥観察を主目的としたツアー。7月14日（日）、ウトロ愛護少年団と知床博物館キッズを対象に無料で実施。（参加者 大人47名、子ども25名）

3. 知床世界遺産センターでの知床海の特別展

7月13日～8月3日の期間、知床世界遺産センター・レクチャー室において、ケイマフリや知床の海鳥に関する写真、知床半島のジオラマなどの展示を行った。



海岸線でのゴミ拾い

7月21日と8月9日の2回、小型ボートを利用して男の涙とフレペの滝に上陸し、打ち上げられているゴミの回収を行った。

浮き球や液体肥料の容器などの漁具を中心に、小型船に積載できる量を回収した。作業後は洋上からゴミは見えなくなり、どちらの地点も観光船の航路として多くの観光客が利用しており、景観の改善にも繋がった。

回収した漁具の処分や活用方法の確立に向けて関係機関との協力体制の構築が課題として残る。



イベント出展

道内外のイベントに計4回出展し、知床の海鳥や海域環境についての周知に努めた。

1. 知床サステイナブルフェス 2024

- ・ 9月29日（日）の斜里会場、10月12・13日のウトロ会場で開催され、全日出展。
- ・ どちらの会場も決して海鳥や野鳥に興味がある人が多いわけではなかったが、展示や物販に興味をもって足を止めてくれた方へ海鳥や協議会の説明を行った。

2. ジャパンバードフェスティバル 2024

- ・ 千葉県我孫子市で行われる、日本最大級の鳥がテーマのイベント。11月2・3日の2日間出展。会場は愛鳥家から地元住民まで様々な人で賑わった。
- ・ 多くの愛鳥家が集まるイベントであり、知床が希少海鳥の生息地であることや観光船の航路で観察できることの伝え方によっては知床への誘致にもつながる可能性がある。

3. ねむろバードランドフェスティバル 2025

- ・ 根室市で1月25日・26日に開催され、両日とも出展。イベントでは、バードウォッチングのツアーをメインに、野鳥に関する講演や展示・物販などが行われた。
- ・ 海鳥の生息環境に関する展示と物販の他に、オリジナルタンブラーづくりと海鳥クイ

ズラリーを行った。野鳥に関心があってもケイマフリを知らない方も多く、そういった方へのアプローチの仕方を精査する必要がある。



ケイマフリの生息・繁殖状況

特定非営利活動法人バードリサーチが環境省事業の請負で、ウトロ漁港からエエイシレド岬までの区間において、6月～8月中旬にケイマフリの生息・繁殖状況および親鳥がヒナに給餌する食物の調査を実施した。

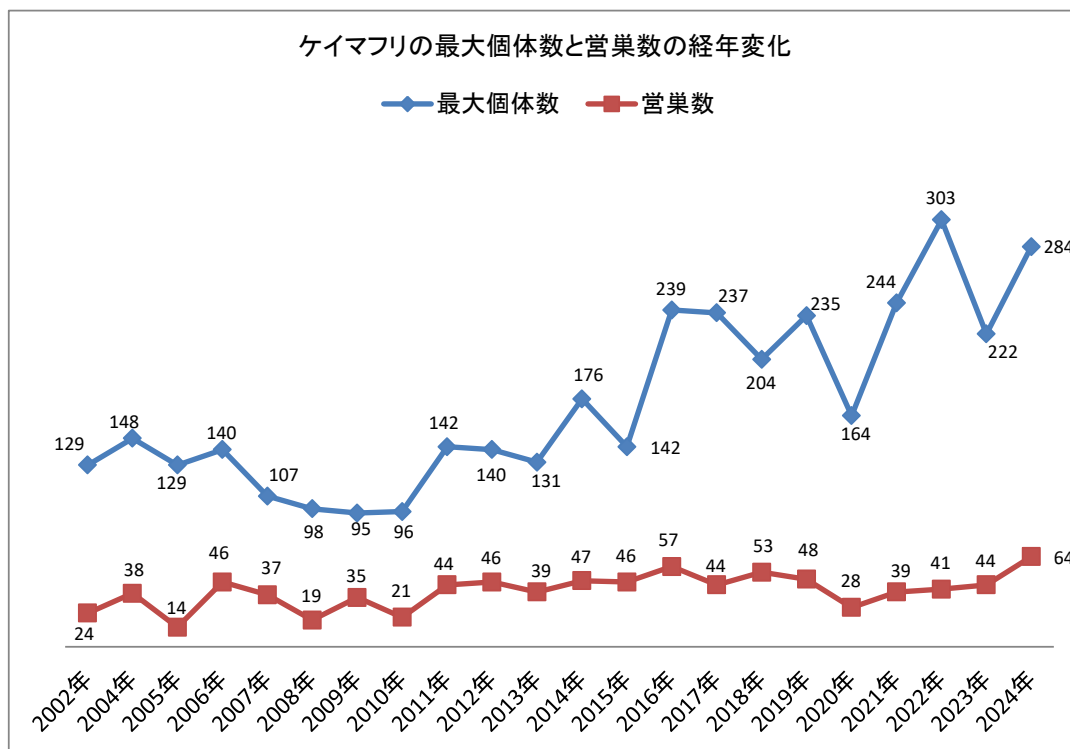


図-1) ケイマフリの最大個体数と営巣数の経年変化

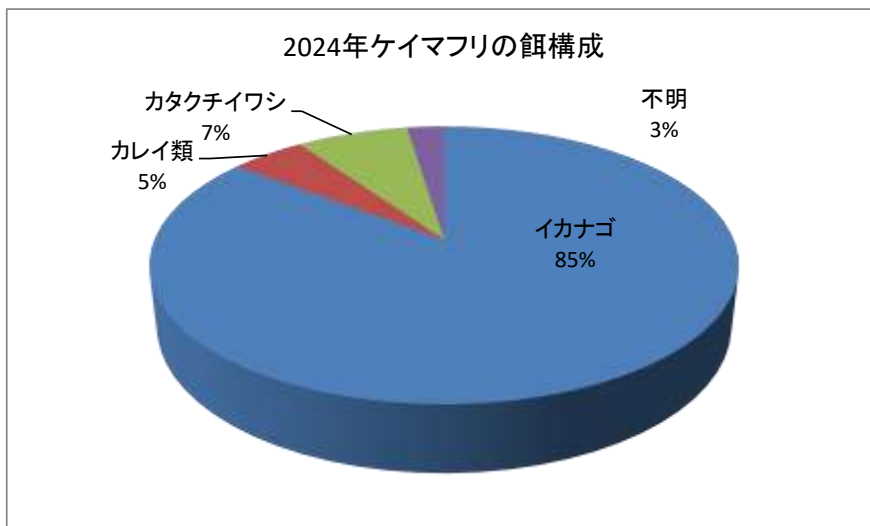


図-2) 2024 年ケイマフリの餌構成

2024 年の最大個体数は 284 羽で、確認した営巣数は 64 巣であった。2023 年に比較して最大個体数で 42 羽、営巣数で 20 巣増加した。

ケイマフリの生息状況を知る上で重要な餌構成についての調査も行っている。この調査は海域の小魚の生息状況も知ることできる。2024 年のケイマフリがヒナにいる巣に持ち帰る餌を調査した結果、イカナゴ：35 例（85%）カタクチイワシ 3 例（7%）・カレイ類 2 例（5%）であった。これまで、イカナゴに次いで捕食していたギンボ類が今回は観察されず、新たにカタクチイワシが 3 例観察された。2023 年はイカナゴ 55%でギンボ類が 17%であった。2024 年はイカナゴの生息数はやや回復し、ギンボ類の生息数は減少した可能性がある。



図-3) イカナゴを捕えたケイマフリ



図-4) カタクチイワシを捕えたケイマフリ